

高尾山 歴史の散歩道

36

明治大学博物館 外山 徹

札 処

往時に較べいささか狭くなつた広庭であるが、ことさらにその感を強くするのは、現在の賑わいであろう。御守授与所と御護摩受付所が向かい合ひ、多くの人々で賑わう広庭は、高尾山上にあつて最も繁華なスポットの一つとなつている。ミシユランガイドへの掲載をきっかけにさらに多くの人々が押し寄せることになつた高尾山であるが、その賑わいの様子は往時いかばかりであつただろうか。

おびただしき高尾参り

高尾山の麓、上柵田村の旧家に伝わる日記は、信仰の山としての高尾山像を今日に伝える貴重な史料である。

江戸時代の中期、享保一六年(一七三一)三月五日のページには「さておびただしき高尾参詣に御座さうろう」という驚きをもつて記した一文がある。この文章は日記の主が自宅近辺で行列を目撃したことなのか、高尾山へ登山してその様子を目の当たりにしたものは不明であるが、過ぎる二月三〇日からの居開帳執行の最中であつた翌々年三月二一日にも「おびただしき高尾参り」という記事が見られ、以下、一七〇〇年代の後半にかけて、この「おびただしき」という形容の記事が日記に度々見られる。記事は三月二一日に目立つが、その日は真言宗の宗祖弘法大師の御影供が

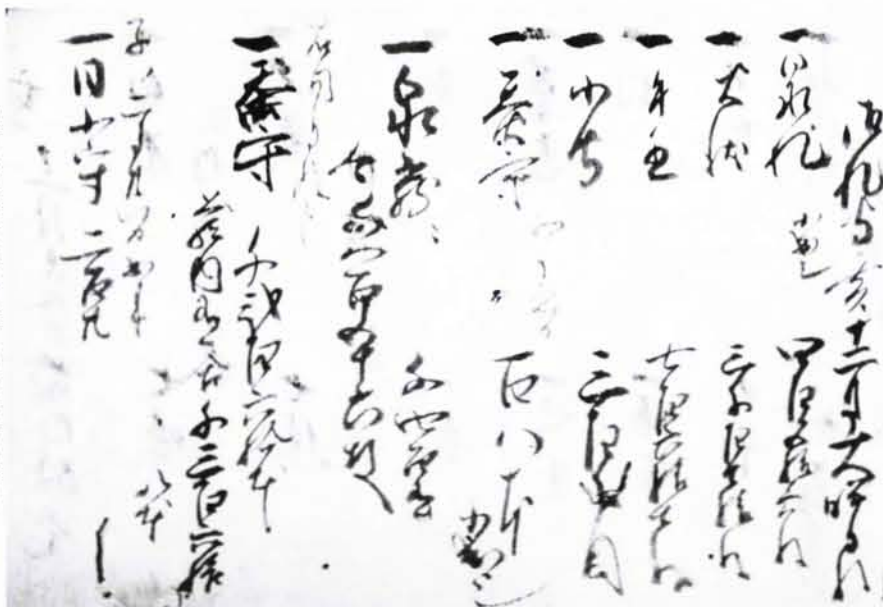
執行される日であつた。新暦で言えばゴールデンウィークにかかる頃、新緑の爽やかな季節である。日記の記事に先立つ享保四年の御影供の様子が薬王院文書の中の備忘録的な帳面の記事から判明している。「年々諸用記」という帳面には、御影供執行にあつたての寺僧らの役割分担が記されていて興味深いのだが、それを通して当時の御影供の様子を知ることができる。「給仕人」「料理人」の記事からは、現在の坊入のように来訪者へ食事が供されていたことも分かるが、「御圖」「奉加所」「御札処」「参詣案番」など、参詣者に対応する役柄が目立つ。今言うスタツフの中には俗名も混じり、地元の上柵田・上長房の村人が手伝いに出ていた。先の日記の主も居開帳執行の節など高尾山に登山し、こうした役柄を引き受けていた。「御圖」が今のような御みくじに相当するものかは何とも言

えないが、札処というところは、訪れた人の求めに応じてそこで護符を授与していたということだろう。

高尾山の護符

高尾山の札処(御守授

与所)には、「家内安全御祈禱之札」をはじめとするお札のみならず、色とりどりに形状もさまざまなお守りが並んでいる。お守りのご利益を見るとその時代の雰囲気というものが伝わってくる。厄



「年々諸用記」に書き上げられた護符の種類

除・開運や火伏は古くから、学業成就や交通安全もすっかり定番となり、近年では腰痛平癒・健脚祈願やぼけ封じなど高齢化社会の到来を実感させる。健康登山などは、昔から病氣平癒の山であつたとはいへ、現代のニーズを汲んだ霊場のあり方と言えるのかもしれない。さて、この歴史散歩の趣旨に立ち返つて、その護符のご利益についてここでは考えてみたい。

先述の札処の開設に加え、具体的にどのような護符が用意されていたのか、実は同じ帳面の記事から分かる。享保四年の暮れ、亥十二月大晦日改として御札守のご利益の別に数が記されている。それによると「泉札 小出シ 四百五十六枚、火伏 三千七百枚、小守 三百五目、蚤守 正月元日百八本、小出シ、泉 蔵二千四百有り 右同日改め申しそらう。」、「一、蚤守 千二

百六十本 蔵内有合 千三百六十八本」などであるが、現在とはだいぶ印象が異なる。数量の圧倒的に多いのは「火伏」である。現在もよく知られたご利益であるが、特に不動明王を祀る寺院の利益として知られる。季節的にも乾燥する上に火で暖を取る時期なので「火伏」が多いということか。遡つて同年四月一八日の記録として「江戸札」「江戸守」「田舎」と札を配札先別に分けて数量を記した記事がある。江戸は札・守が各三〇〇必要とされたようだが、田舎というのは江戸以外という意味だろうが、数種の形状の札合わせて五八八枚とある。札・守をセツトと考えると江戸は田舎の半分の数量となるが「江戸」と括弧して記してあるということは、それだけ重要な配札先として認識されていたということだろう。「火事と喧嘩は江戸の華」と言うよう

に、江戸の人々にとつて火災は日常的な脅威であつた。そのため、江戸では特に火難除の利益が求められ、不動明王の人氣は高かつた。地域性を反映した利益「反対に数が少ない「泉札」とは何か。これは水の利益である。泉札は同年の六月二七日付で「合千九百枚有改」という記載もあるが、これは降雨を祈願する札のようである。元々高尾山は浅川の上流域の一つであり水源地に対する信仰である「水分の神」と見なされる環境にある。琵琶滝川の上流部が雨宝陵とされ弁天が祀られたことに端的に表れている。近隣の村々が高尾山で雨乞をおこなつた記録もあり、水を呼ぶ霊験は弘法大師信仰とも関わる。水が火を伏せるものという見方をすれば、水分信仰が火伏の利益に結び付いている側面もあるかも知

れない。その意味では、琵琶滝ないし山間より湧き出る琵琶滝川が存在は高尾山が聖なる地として崇拜されるようになった根源の一つと言えるかもしれない。「牛王」は正確には「牛王」すなわち「牛王宝印」のことになるが、高尾山のそれがどのような性格のものであつたか詳らかではない。牛王は神使としての鳥を凶柄とするため、関西では竹に挟んで田畑に立てて虫害除とする習俗が報告されている。「蚤守」は生糸を採取するために育てる蚕の無事生育を祈り、鼠などの害から守る意味である。享保のこの頃には高尾山の信仰圏となる地域においては養蚕が盛んにおこなわれていたことを示す。蚤守護はかつて高尾山の特徴的な利益としてよく知られていた。時代は下つて文政年間のこととなるが、『武蔵名勝図会』(一八二〇)には「鼠口留秘符薬王院より出す。鼠

家財を傷ることあるとき、そこへ置けば、必ず出でず。又、養蚕のとき鼠の蚤を食ふことあれば、この符にて鼠出でずといえり。」と特記している。この後、安政六年(一八五九)の横浜開港以降、北関東で生産された生糸の中継地として八王子は空前の繁栄を謳歌することとなり、高尾山信仰も高揚することになる。蚤守護の利益は近代以降もしばらく続き、昭和二年(一九二七)刊の『高尾山誌』にも「鼠口留秘符は特に、鼠害を防ぐに顕然であるから遠近の養蚕家が争つてこれを受けて帰る」と記される。それから九十年近くが過ぎた。今日、産業として養蚕はすっかり廃れてしまつたが、一九九〇年代の初頭までは札処の見本の中に「蚤守」を見かけた記憶がある。おことわり 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。